



産出額 養殖がけん引

管理徹底、稚魚生産にも力

守り育てる

〈中〉

第43回全国豊かな海づくり大会

県内の漁船による漁獲量は落ち込んでいる。2022年は1万8984トで、鶴見町(現佐伯市)で「第1回全国豊かな海づくり大会」が開かれた1981年に比べ、84・3%も

減った。乱獲が続いたことや海水温上昇などが原因に考えられている。

日出町で建網漁を営む男性(80)は「若い頃はたくさん魚が取れた。頑張った分だけ稼げた」と言う。時代が

変わりに、休漁日の設定など資源保護の意識は漁業者に浸透したものの、漁獲減に歯止めはかかっていない。計画的な生産を見込める養殖漁業が主流になったことも一因だ。県内の産出額は2010年に漁船を上回り、22年は298億円で漁業全体の76%を占めるまでになった。

「需要に応じ調整」

大分県の養殖でヒラメは生産量日本一を誇る。1980年代から佐伯市蒲江下入津地区で盛んだ。同地区の山本裕太郎さん(35)は親元で就業して3年目。陸上の小屋に設けた水槽で1万匹、他にフグも1万匹を育てている。

物価高で飼料や電気代の値上がりで痛手になっているものの、管理を万全にすることで安定した品質や出荷量を確保できるメリットが大きい。「取引先のニーズに応じて、サイズや脂の乗り具合を調整している」と説明する。

若手の山本さんは地域に根差して、養殖を守り続け

ていくつもりだ。「手間をかけたヒラメを食べてもらえるのが何よりうれしい。ほかにも佐伯のおいしい魚を仲間と発信していきたい」と語る。

成長に適した地域

水産資源の回復を目指し、稚魚を増やす取り組みも進みつつある。県は老朽化した県種苗生産施設(国東市国東町鶴川)を7月に建て替えた。水槽を一新し、マコガレイやヒラメなどの生産能力は2割増えた。育てた稚魚は成長に適した地域を選び、海に放流している。▽豊前海 クルマエビ▽伊予灘 マコガレイ▽豊後水道北部 マダイーといった具合だ。同施設は温暖化で生息域が北上しているとされる高級魚キジハタ(アコウ)の稚魚生産にも挑む。

県水産振興課の堤憲太郎課長補佐(55)は「将来に水産資源が増えて、漁業者の収入安定につながると信じ、これからも地道に取り組みを続けたい」と語った。

(清松俊朗)



水槽で養殖するヒラメをチェックする山本裕太郎さん。10月23日、佐伯市蒲江西野浦



〔問①〕 大分県内の漁船による漁獲量は減っています。2022年は、1981年に比べて何%減りましたか。その要因は何ですか。

〔問②〕 代わりに養殖漁業が主流になっています。2022年は漁業全体の何%を占めていますか。

〔問③〕 佐伯市蒲江の山本さんは、養殖のメリットをどのように感じていますか。

〔問④〕 漁業を盛り上げるための方法を考えよう。